

和の風 町長随想

増澤 善和

天皇家と南越前町(五)

④養蚕神を祀る神社

(一) 譽田別命(品陀和氣命・応神天皇)

八幡神社(宇津尾・久喜・杉谷・八飯・湯尾神社内・大谷・具谷・大良・河内・菅谷・河野・八田・赤萩の春日神社内・西大道)

鹿萩神社(南今庄)

鹿蒜田口神社(新道)

湯尾神社(湯尾)

白山神社(瀬戸)

白鬚神社(合波)

熊野神社(今泉)

(二) 保食神(豊受姫大神)

新羅神社(今庄)

稲荷神社(湯尾神社内)

河野・今庄地区に八幡神社(古代にはヤハタノオオカミ)が多いが、「八」は八州(日本)を、「幡」をハタと発音すると朝鮮語の「海」となり、海を渡って日本にきた白神軍団の信仰とも解釈できる。

⑤継体天皇時代の絹糸

この時代の古墳である足羽山古墳群から、越前最古の絹織物が出土した。この織物は家蚕(白い糸を出す飼蚕)と野蚕(黄色の太い糸を出す日本野性種のヤママユ)の混紡として

は日本最古のもの。先述の日本書紀で越前の白蛾を献上の後の説明文に「白蛾を角鹿郡(後の敦賀郡)の浦上の浜に獲たり」とある。白い糸を吐く貴重な飼蚕を朝廷に献上した記録だが、この「浦上の浜」とはどこか。まず、「浦」は海岸「上」は主人の意で東を示し、朝廷は越前白蛾の礼として氣比神宮に社領二十戸を与えているので「浦上の浜」は、敦賀湾東側一帯で氣比神宮近くの浜と推定。そして、河野地区は十世紀まで敦賀郡であり、大谷・大良は氣比神宮の神戸として塩・マユ等の神事供進物をしたことが氣比社記に残る。特に大谷浦は当時百二十戸を超え、現在でも八幡神社(譽田別命)と、その境内社も含めると七社を残し、養蚕・製塩・漁業と港など活気ある村であったので、日本書紀の「浦上の浜」である可能性は高い。

もう一つの候補地として、若狭ではあるが氣比神宮と関係の深い日向を挙げたい。それは往時、日向は隣の早瀬と共に「浦郷」と呼ばれており、譽田別命を祀る稲荷神社も現存している。そして、日向をヒウガと呼ばずヒルガと呼ぶのは、今庄の神蚕とは逆で、蚕蛾又は蚕神の転訛とも考えられるからである。(全くの私見)

このように、継体天皇によって推進された養蚕であるが、天皇の曾孫である聖徳太子によって更に奨励された。太子の十七条の憲法・十六条に「民を使うに時を以てするは古の良典なり。故れ冬月には間有りて(手があいているので)、以て民を使うべし。春より秋に至りては農桑の節なり(田畑や養蚕の頃なので)、民を使うべからず。それ農せざれば何をか食まむ、桑とらずは何をか服む」とある。この古代に活躍されたお二人の養蚕の精神が、中世・近世の越前地方にも引き継がれたようである。

⑥南越前町の養蚕

河野地区の養蚕であるが、日本書紀中の「浦上の浜」がどこかは別として、敦賀湾東浦(河野地区を含めた広義)一帯は農漁業の副業として養蚕が盛んであった。特に温暖で初霜の遅い海岸部の桑は、晩秋蚕に重宝されて、近江の余呉村・木ノ本村や賤ヶ岳近くの西山村まで送られた。夕方採られた桑葉を舟で敦賀に出し、後は陸路で明朝早く近江に着いたようだ。明治以後鉄道が開通すると、貨車輸送となった。私も遺伝実験で暗秋産を育てた時は、杉津の国道横の畑桑で何回も頂いたことがある(今はミカン畑となる)。

今庄地区は古くから養蚕が盛んであったが、特に幕末安政の頃から横浜開港貿易において、有利な今庄生糸(マユ糸を製糸したもの)が輸出されている。古文書として横浜港での生糸取引の仕切書が残り、末尾に「越前今庄・京藤小八郎様・斉藤忠三郎様」とある。明治になると今庄宿として収入がなくなり、周辺各村を含めて桑園を開拓し、養蚕・生糸生産を図った。明治五年に今庄製糸信用販売組合・大正三年には北陸製糸株式会社設立され、県内のみならず滋賀県からもマユが集められたようだ。

そして平成七年、湯尾の落井三郎さんが福井県最後のマユを出荷され、古代から続いた越前の養蚕事業は幕を閉じた。

また、桜橋近辺の集落―特に赤萩の桑は、早生桑(早春蚕用の春摘みの桑)を取り木や接ぎ木で増殖させ、大量の桑葉を近江や脇本村の今村桑問屋に送り届けたようだ。大正五年には、赤萩養蚕組合は県下優秀養蚕組合として表彰され、皇后陛下から賜菓の伝達を受けている。

さて、養蚕関係の最後に少し悲しい話。近江の伊具村大音は、昔から生糸で作る琴や三味線の糸の生産地であり、民謡の本場でもあった。ここに次の民謡が残る。

「今庄出てから孫谷までは、笠の雫やら涙やら、江州・若狭に繰屋がなくば、こんな苦勞はしよまいものを」と。当町出身の糸操娘か製糸研修生の作であろう。(次号の製塩で最終稿の予定)